

アカデミックの現場から

見る香川県

さぬき 学びの場



元穴吹エンタープライズ代表取締役

こじま ひでお

小島英夫 氏

(せと)うち観光専門職短期大学
専任教員(予定)

幼い頃から旅行が好きで身近だったという小島氏は、ホテル業に憧れを持って立教大学社会学部観光学科に5期生として入学した。大学生時代から、ホテル業務などの実践教育を受けた経験を持つ。

卒業後、入社した全日空エンタープライズ(株)では、沖繩を始め新規のホテル開業準備に携わってきた。宿泊、料飲サービスだけでなく、食材の仕入れなど、ホテル業の全体像を見てきたという。

昭和62年に故郷、高松市に帰り穴吹興産(株)のホテル開業準備室に入社。その後の手腕は、ロイヤルパークホテル高松、高松国際ホテルの総支配人を歴任し、平成15年に代表取締役社長に就任することでも明らかだ。

11年間の社長業ののち、自分が観光学科で学び社会に出た経験を活かしたい、後続の人材を育てて行きたいと思っていたところ、令和3年4月に開学予定のせとうち観光専門職短期大学(仮称)(高松市屋島西町二二六六一)穴吹忠嗣理事長)からの要請があった。

小島氏は同短期大学の2年からクラス分けされる「宿泊」をメインに専任教員に着任予定。同校で

は2年生から、「宿泊」「観光地域振興」「航空」「鉄道」の4クラスを設ける予定になっている。

同校では学術と実務の両面から観光の専門職を育てる。早くから社会や、自分の目指した職業を具体的に知る事が出来る、と小島氏は話す。

また、特に学生にはマーケティングを学んで欲しいと言う。専門性を高める機会が多い同校のカリキュラムではあるが、多様性のあるホテル業務の中でもマーケティングがこれからの重要な分野だと言う。

「今、一部ではマイクロツーリズムという言葉も出ていますが、40年間ホテルマンとしてやってきて、大打撃を受けた事は何度もありました。ですが、そのたびに以前より伸びたという実績が観光にはあります。大きな流れとして、グローバルな観光事業というのは留まらない成長産業だと思っています」と、アフターコロナの観光についても、豊かな経験の一片を見せてくれた。

各地域、多種多様の取り組みが行われ始めた。観光職の人材確保はやはり急務であろうと思われる。

欄 告 広